

# 淡谷のり子展と生家淡谷家資料

太田原慶子<sup>1)</sup>

Documentation of Noriko Awaya and Her Birthplace

Keiko OAHARA

Key words: 淡谷のり子、淡谷悠蔵、明治・大正期の商家資料

## 1 はじめに

先人展示室では、おもに明治時代から昭和時代にかけて様々な分野で活躍した本県ゆかりの人物達を紹介している。平成19年度には生誕百年を記念して「淡谷のり子展」を開催した。展示概要とともに、生家淡谷家に関する資料の一部について報告する。

## 2 淡谷のり子展

昭和時代の歌謡界を代表する歌手淡谷のり子（1907－1999年 本名淡谷のり）の生誕百年記念展（2007年12月1日から翌1月20日）を青森市、青森県近代文学館と共催で開催し、青森市に寄贈保管されている遺品及び歌手活動資料（舞台衣裳、レコード、楽譜類）を中心に紹介した。展示構成は、「のり子の生い立ち～旧家に生まれて」「歌手淡谷のり子とその素顔」「のり子の心の支え～叔父淡谷悠蔵」とした。表1に本展で展示した資料の一覧を示す。

「のり子の生い立ち」では、のり子の生家である、現在の青森市本町一丁目付近にあった呉服商「大五」阿波屋関連資料として、暖簾、帳簿類、什器類を紹介した。のり子の叔父にあたる淡谷悠蔵（1897－1997年）が所蔵保管していたものである。

阿波屋の先祖は、淡路島の出身で初代は源四郎という。奉公していた大坂の大和屋の朝日丸という船に乗り込み、青森への航海途中に遭難し、以後青森に住み着いたとされる。源四郎は魚商を営み、名を清蔵と改めた。三代目清蔵が魚商のかたわら呉服商を営み成功、四代目清蔵は呉服を専業とした（青森市史1955年）。のり子が生まれた頃は、同市安方にあった本家「大世」を中心に阿波屋は全盛を誇った。のり子の祖母まつは、本家五代目清蔵（1846－1923年 第四代青森市長）の妹で、祖父金蔵は旧弘前藩士族出身だった。当時の「大五」の奉公人は30人を超え、奥の台所では常に20人近く働いていたという。父彦蔵が「大五」を継いだため、長女のり子は跡取りとして祖母に育てられた。1907年（明治40）に彦蔵の長姉な不と婿養子美八が「大正」と称して分家、悠蔵が「大正」の養子となった。

1910年（明治43）5月3日、安方付近から出火した青森大火は、中心部を焼き尽くした。「大五」「大正」ともに大きな被害を受け、その後「大五」は衰退の一途をたどり、1913年（大正2）に店は人手に渡った。

「歌手淡谷のり子とその素顔」では、生家の没落を受け、母妹と上京し流行歌手となったのり子とその活躍の様子を追った。東洋音楽学校（現東京音楽大学）で本格的な声楽を学び、ソプラノ歌手として第一歩を踏み出したのり子は、家族の生活を支えるために流行歌手に転向する。転向直後の心境や活躍を雑誌記事等で紹介し、1937年（昭和12）に発売した「別れのブルース」、翌年の「雨のブルース」のヒットで流行歌手



写真1 生家淡谷家資料展示状況



写真2 歌手活動の記録レコード他

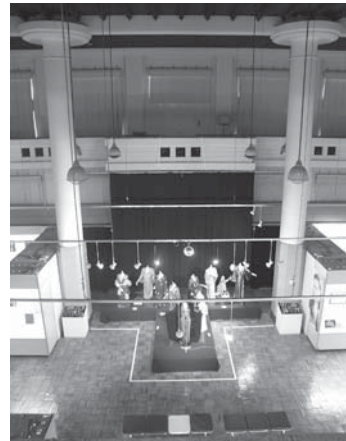


写真3 展示会場に舞台を再現

1) 青森県立郷土館 学芸主査（〒030-0802 青森市本町二丁目8-14）

としての地位を不動のものとした彼女の世界を舞台衣装や自筆の歌詞ノート、大量の楽譜、レコードで再現を試みた。保管されていた楽譜の中には彼女自身が音符を写し取り、歌詞を書き込んだものなどが含まれる。自筆の歌詞ノートなどからも、歌への思い、言葉を重視する彼女の姿勢をうかがうことができる。長年の活動を経て1971年（昭和46）にレコード大賞特別賞を受賞したアルバム「昔一人の歌い手がいた」は、歌う自分を批判するもう一人の自分を持ち、客観的に評価するというような努力を常に怠らなかつた彼女を物語る。また、素顔ののり子を伝える資料もある。食器や小物類など美しく愛らしいものを好み、自分の衣裳と同じ生地で人形の服を作り、レースも編んだ。歌うことに厳しい姿勢を持ち続けた彼女の心を癒したのは、美しく愛らしいものに囲まれて過ごす時間と苦勞をともにした家族の存在だった。

「のり子の心の支え～叔父淡谷悠蔵」では、彼女の生き方を認め、温かく見守り続けた悠蔵との交流に焦点を当てた。悠蔵は、「大五」阿波屋の父・金蔵、母・まつの子の13人兄弟の末っ子として生まれた（のり子の父彦蔵は悠蔵の兄）。10歳で長姉夫婦の養子になり、養父母は「大五」から分家し市内に呉服屋「大正」阿波屋を開いた。青森高等小学校（現浦町小学校）を卒業した悠蔵は、「大正」を継いだが、旧家の因習と束縛に反抗し、東郡新城村（現青森市）で農業を始めた。その後、文学活動を積極的に展開、短歌雑誌「黎明」「座標」を創刊、「座標」は「黎明」他の県内の文学同人誌が統合した全県的な総合文芸誌として本県文化運動史に貴重な足跡を刻み、悠蔵はその編集の中心として大きな役割を果たした。1952年（昭和27）に日本社会党公認で衆議員議員選挙に立候補、初戦で敗れたものの、翌年4月当選。初当選以来、6期16年連続当選し、国政革新のため尽力した。72歳で政界を引退、土を耕しつつ書を読むという生活をおくり、晩年まで旺盛な執筆活動を展開した。文学者、農民運動家、政治家、幅広い分野で大きな業績を残した（注1）。

悠蔵は、歌手として信念を貫き通したのり子の良き理解者であった。お互いに「じょっぱり」を超える「からきず」と称し、仕事と生き方を認め合った。のり子は、悠蔵の著書『苦学一生』（労大新書77 1983年）の刊行に寄せて次のような思いを語っている。「私たちのうちは商家で、親は子供に学問をさせませんでした。ですから、それこそ独学であれまですることになったことは、私の叔父ながらほんとうにりっぱだと思います。（略）叔父はたいへん強情っぱりだし、私も強情っぱりですから、叔父をこまらせたこともあります。時には叔父をうらんだこともあります。『一生、叔父だの姪だのといっはほしくない』といっは絶交したこともあるのですけれど、ちゃんと元に戻りました。（略）なんといったらいいんでしょうか、とても冷たいことも時々いっはうですけれども、内心は暖かいんですよ。ほんとうに情の人ですから。」一方の悠蔵も「のり子の生涯は風雪に耐えて来た生涯だ。その風雪にきたえられて、性格にも強さが出来、口も悪くなって、時々はきびしい、意地のわるいようなもののいい振りにもなるが、そんなよそ行きの身の構えを捨てた時、のり子は人のいい無邪気な心の素顔を見せる。私はのり子のその心の素顔が好きだ。」（「素顔ののり子」青森NOW 1972年）と書く。1978年（昭和53）に歌手生活50周年記念レコードを発表したのり子への思いを日記中で「のり子の新しいレコードをきく。若手の歌手に挑戦という気配を感じるが老境淡々とおのれの歌をうたう態度あれと思う。」（注2）と記述する。深い信頼に結ばれた叔父と姪の交流は晩年まで続いた。

### 3 淡谷家に関する資料

歌手としてのり子については、青森市主催の展示会が度々開催されてきた（注3）が、生家に関する資料はこれまでもほとんど紹介されてこなかった。のり子が幼少期を過ごした明治末期から大正期、「大五」「大正」のような商家の経営、暮らしが大きく変わった時期である。悠蔵の手元に残されていた資料は、のり子と悠蔵の生家としてだけでなく、明治末期から大正期にかけて青森市における商家のあり方、変遷を知る上で様々な情報を含んでいる。

暖簾（個人蔵、写真1参照）は、「大五」（154×154cm）「大正」（154×160cm）のものがあり、「大五」のものは風呂敷に仕立て直されているものの、2点とも保存状態は良い。また、商家時代に用いられた膳椀類も多数保管され、朱塗椀の外底には「ア」と記されている。膳収納箱には「大正」と墨書があり、朱塗りの膳が6点収納されている。また、代々長女が使用していたという箸（錫製長さ17.5cm）も悠蔵の家族の元に残されていた。

帳簿類は大正期のもので、全国的に当時流通し始めた洋式帳簿に分類されるものであり、おもに1918～1926年（大正7～15）前後の「大正」における仕入帳、貸付台帳である。既成の洋式帳簿の流通段階の早い時期から既に「大正」ではその形式を採り入れていたことがわかる。背に「元簿」とあるものには、1918年（大正7）に油川に缶詰工場を建てたイタリア人ファブリーの名も確認される。「ファブリー」には同年2月から7月にかけてフロック（コート）、チョ



写真4 「大正」と書かれた膳収納箱  
31×34×41 (cm) 個人蔵

スキのような衣料品他、窓掛（カーテン）などを納めている。悠蔵は、ファブリーの住宅兼工場へカーテンを取り付けに出向いた様子を記している（『なつかしの青森—庶民の歴史—』1974年）。また、この頃、のり子の両親は細々と雑貨商や酒屋を営んでいたがうまくいかず、金銭的な援助を「大正」に求めていたことを窺わせる記載もある。「大正」は、1918年（大正7）には悠蔵が商人を嫌って新城村（現青森市）で農業を始めたため、商売を辞めてしまったとされるが、帳簿の記述はその後もしばらく続いている。これらは、当時の「大正」ような商家の経営を知る上で貴重な資料であり、今後詳細な検討を要すると考える。



写真5 仕入帳 淡谷洋服店  
大正7～12年の記載、27×21×3.5 (cm)  
貸付台帳 大正 淡谷美八  
大正9～15年の記載、34×26×5.5 (cm)  
他に、元簿  
大正5～11年の記載、22×16×2.8 (cm)、全て個人蔵

表1 生誕百年記念 淡谷のり子展 展示資料一覧

資料名	備考	所蔵	年代他
のり子自筆の歌詞ノート	公演先に必ず持ち歩いた歌詞ノート。「別れのブルース」他117曲の歌詞が書かれている。	青森市	
のり子自筆の手帳		青森市	
日本レコード大賞特別功労賞	歌謡界における業績をたたえ、のり子没後に授与されたもの。	青森市	1999年
青森県実地明細図（「目で見る青森の歴史」付録）	安方にあった淡谷本家「大世」の様子。青森屈指の豪商だった。	青森県立図書館	1892年
青森大火跡明細地図		郷土館	1910年
青森市大火災損害調査書		郷土館	1910年
「大五」阿波屋のれん（風呂敷仕立て）	のり子生家関連資料	個人	明治末
「大正」阿波屋のれん	のり子生家関連資料	個人	明治末
「大正」阿波屋で使われていたもの（膳・椀類）	のり子生家関連資料	個人	
「大正」阿波屋 帳簿類	のり子生家関連資料、仕入帳、貸付台帳他	個人	大正期
錫製銚子	のり子生家関連資料	個人	明治期
「池田淑人セロ演奏会」ポスター（複写）	秋田市出身の池田淑人の演奏会のポスター。のり子がソプラノで競演する予定だったが当日は健康を害し出演を見送ったという。	秋田県立博物館	1930年
のり子自身が所有していたレコード	おもに昭和20年代のもの（テイチク、ビクター）	青森市	
レコード：ラストソング		青森市	1982年
レコード：淡谷のり子ライブ	1981年10月29日、淡谷ジャン・ジャンでのライブを収録	青森市	
レコード：昔一人の歌い手がいた		青森市	1971年
のり子の手元にあった楽譜類	約300曲（総数900曲）が残されている。	青森市	
書籍楽譜：シャンソンアルバム第2輯	創学社、書きこみ、サインあり。	青森市	
書籍楽譜：スタンダードピース No.38「伊太利の庭」	東京楽信社、書きこみあり。	青森市	
書籍楽譜：シャンソンアルバム第1輯	創学社、表紙にサインあり。	青森市	1950年
書籍楽譜：シャンソンアルバム第3輯	創学社、表紙にサインあり。	青森市	1951年
書籍楽譜：シャンソンアルバム第4輯	創学社、歌詞書きこみあり。	青森市	
歌手生活30周年記念「酒、唄、男」リサイタル台本		青森市	
ラジオ東京放送脚本「淡谷のり子の夕べ」（酒、うた、男）	1958年2月27日放送	青森市	1958年
NHK テレビ放送台本「歌の花びら」	のり子出演 1959年4月25日放送	青森市	1959年
ニッポン放送台本「歌の祭典」日本のシャンソン特集	のり子出演 1959年12月28日放送	青森市	1959年
歌手生活30周年記念「淡谷のり子をきく夕べ」放送台本	東京大手町産経ホール	青森市	1959年
歌手40周年記念リサイタル「淡谷のり子愛を歌う」	東京大手町産経ホール	青森市	1969年
45周年記念ロングリサイタルパンフレット		個人（現在郷土館蔵）	1974年
コンサート「生命ある限りこの唄を」パンフレット		個人（現在郷土館蔵）	1982年
服部良一からの書簡	のり子へ流行歌界の発展を願う言葉を語る服部（1907～1993）の書簡。録音テープ「青い部屋」（作詞サトウハチロー）同封。	青森市	
日本レコード大賞特別賞	アルバム「昔一人の歌い手がいた」	青森市	1971年
のり子ステージ衣装・靴		青森市	
装飾品・香水類	イヤリング他	青森市	
着物		個人	
のり子自筆短歌帳	のり子が好んだ短歌など。「ひとすじの道生きて来てあかあかといのちの涯に燃ゆる夕やけ」この歌をはじめ悠蔵が詠んだ。	青森市	
のり子自筆の色紙	「紅つばき深雪の夢を忘れえず」「冬深しねむる椿のつばみかな」「流れこしつばき一輪にひかれける」他	個人（現在郷土館蔵）	
大切にしていたパービー人形と手作りの洋服	自分の衣装と同じ生地で作った、人形の服など。	青森市	
のり子手編みのレース		青森市	
愛用の食器		青森市	
のり子から家族にあてた書類類	渡辺はま子（歌手）とアメリカ公演に出かけた際に家族に宛てた葉書やカード。	青森市	1968年
「前田寛治作品集」	美術出版社	青森県立図書館	1996年
月刊「東奥」第1巻6号	「円盤界活躍の兼出身芸術家」の一人としてジャズ界でののり子の活躍を伝える記事	青森県近代文学館	1939年
「レコード」第1巻第3号	発行音楽世界社 「レビューのプリマドンナを夢見る淡谷のり子さん」の中で、「流行歌手になろうと決心されたのですか」という質問に「親子三人の生活を立てて行かねばならない、という立場からそういうふうにならざるを得ない」と答えている。横書きのサイン署名はめづらしい。	個人	1930年
「いのち愛し」	淡谷のり子著 鏡浦書房（装丁 阿部合成）	青森県立図書館	1959年
「ブルースの女王 淡谷のり子」	吉武輝子著 文藝春秋社	青森県立図書館	1989年
「もう一度別れのブルースを 淡谷のり子ドキュメント50」	東洋図書出版	青森県立図書館	1978年
「この人と語ろう」	鈴木健二著 日本放送協会	青森市	1978年
「ニセモノとホンモノ」	淡谷のり子著 KKロングセラーズ	青森市	1986年
「ブルースのこころ」	淡谷のり子著 新日本出版社	青森市	1978年
「女の自叙伝 歌わない日はなかった」	淡谷のり子著 婦人画報社	青森市	1988年
「[頭の悪い女]と言われないために—に愛嬌二に気転」	淡谷のり子著 ごま書房	青森市	1992年
「シリーズ人間の記録⑩ 淡谷のり子 我が放浪記」	淡谷のり子著 日本図書センター	青森市	1997年

資料名	備考	所蔵	年代他
『淡谷のり子 私のいいふりこき人生』	淡谷のり子著 海竜社	青森市	1984年
『老いてこそ人生は花』	淡谷のり子著 海竜社	青森市	1991年
『最後の自伝 いのちのはてに』	淡谷のり子著 学習研究社	青森市	1995年
『日録20世紀 1938年(昭和13年)』	講談社、雑誌(週刊)、淡谷のり子紹介	青森市	1998年
『夫と妻』	永六輔著 岩波新書	青森県立図書館	2000年
『ふるさとの歌2』	主婦と生活社	青森県立図書館	1968年
淡谷悠蔵自筆色紙		個人	
淡谷悠蔵原稿「太宰と津軽」	『太宰治と青森のまち』(北の街社)所収	青森県近代文学館	1988年
淡谷悠蔵原稿「りんごの味」		青森県近代文学館	
阿部合成から悠蔵に宛てた書簡		個人	
淡谷悠蔵の日記		個人	
のり子から悠蔵へ宛てた書簡	忙しい悠蔵の身、家人を気遣うもの	個人	
のり子・悠蔵自筆色紙	「苦学一生・ひとすじの道…」	個人	
『黎明』第1巻第1号		青森市教育委員会	1919年
『黎明』第6巻第2号		青森市教育委員会	1924年
『黎明』第7巻第6号		青森市教育委員会	1925年
『座標』第1巻第1号		青森県近代文学館	1930年
『野の記録』	淡谷悠蔵著 春陽堂	青森県近代文学館	1958年
『なつかしの青森-庶民の歴史-』	淡谷悠蔵著 東奥日報社	青森県近代文学館	1974年
『袖振り合うも わが想い出の人びと』	淡谷悠蔵著 北の街社	青森県近代文学館	1974年
『野の記録』全7巻	淡谷悠蔵著 北の街社 (装丁 阿部合成)	青森県近代文学館	1976年
『淡谷悠蔵著作集』全24巻	淡谷悠蔵著 北の街社 署名入り	青森県近代文学館	1976~1981年
週刊「毎日グラフ」No.37 昭和51年9月5日号	人間探訪 淡谷悠蔵	個人	1976年
『青森NOW No.6』	淡谷悠蔵著(素顔ののり子)	青森県近代文学館	1972年
『苦学一生』	淡谷悠蔵著 労大新書77 労働大学	青森県近代文学館	1983年
『酒・うた・男』	淡谷のり子著 春陽堂	青森県近代文学館	1957年
『淡谷のり子という女』緑の苗豆本 116	淡谷悠蔵著	青森県近代文学館	1978年

(絵画)

淡谷のり子像	関野準一郎(木版)	青森市	1981年
淡谷金蔵肖像	今純三(油彩、キャンバス)、金蔵はのり子祖父にあたる	個人	1925年
淡谷のり子肖像	不明(油彩)	青森市	
淡谷のり子肖像	高英男(淡彩)	青森市	
馬	西沢赤子『なつかしの青森』出版記念、(淡彩、紙)	個人	
薊(あざみ)	阿部合成(油彩、板)	個人	
ママさんの絵	阿部合成(油彩、板)	個人	
蕨の茂れる家	浜田英一(淡彩、紙)	個人	
新城の山	浜田英一(油彩、板)	個人	1938年
温室	浜田正二(油彩、板)	個人	

#### 4 終わりに

本展では、昭和期を代表する歌手淡谷のり子の内面に迫る生家関連資料及び政治家、文学者である叔父淡谷悠蔵との交流に焦点をあてた展示を行った。また、歌手として一時代を築いたのり子の精神的な支えとして悠蔵の存在が大きかったことをその著者や日記、書簡で再確認し広く紹介できる機会となった。生家に関する展示では、悠蔵の手元に残されていた多くの資料をご遺族のご好意で公開し、整理する機会を得た。今後、明治末期から大正期にかけての青森市の商家資料としてもさらに精査していきたい。

#### 謝辞

この企画展開催に至るまでの調査及びその後の資料整理で、三野亜沙子氏はじめ、多くの方々、機関にご協力をいただきました。感謝申し上げます。

注1) 淡谷悠蔵については、青森県近代文学館企画展「生誕110年 淡谷悠蔵展」(平成19年10月13日～11月21日)関係資料による。

注2) 1978年1月28日の日記中の記述。

注3) 会場 道の駅「ゆーさ浅虫」で平成13年から開催。同19年8月25日から11月11日まで「第7回ブルースの女王 淡谷のり子展」開催。

#### 主要参考文献

青森市史 人物編 産業編 1955年

淡谷悠蔵 『なつかしの青森-庶民の歴史-』東奥日報社 1974年

木村慎一 『油川町の歴史』1993年

山崎祐子 『明治・大正 商家のくらし』岩田書院 1999年

青森市歴史民俗展示館「稽古館」 「商う-宣伝に使われた品々-」展示図録 2000年

平塚市博物館 「冬期特別展 食の民具たち」展示解説図録 2004年

広島県立文書館 平成20年度収蔵文書展「江戸・明治 商家文書の世界」 2009年